

《通販よもやまばなし》

第3話 江戸時代にも通販があった！

通販の始まりはアメリカだと思われる方も多いはずですが、また、その先駆けとしてシアーズの名を思い浮かべる方もあるかと思います。たしかに通販がいち早く一般家庭にまで普及したのはアメリカですし、後に巨大小売業へと成長するモンゴメリー・ウォードやシアーズ・ローバックといった会社が、通販を始めたのが1870年代から80年代にかけて、アメリカでは南北戦争が終り、日本では明治時代が始まった頃ですから、両社をメールオーダーによる通信販売の元祖と呼んでも差し支えないでしょう。

ところがなんと、それよりさかのぼること百年以上、1700年代初頭の江戸の町に、早くも通販を始めた店が現れたのです。「四ツ目屋」という屋号で、広く知られていました。

当時ベストセラーとなったショッピングガイド本「江戸買物独案内（えどかいものひとりあんない）」には、こう書かれています——

「諸国文通にて御注文の節は、箱入り封付けに致し差上げ申し候」、現代語にすれば、「全国どこでも、手紙で注文いただければ、箱に納め、しっかり封をしてお届けします」ということになり、これはまさに「通信販売」そのものです。

このキャッチコピーでは「封付け」というのがミソなんですね。つまり、注文者以外の人、例えば女房が、注文した亭主の留守中に受け取ったとしても、中身がわからないように、しっかりと封をしてお届けするというわけです。

では、こんなふうにして通販したのは、どんなものだったのでしょうか。主な品名を挙げると「長命丸、女悦丸、いもりの黒焼き、りんどの輪りんの玉、鼈甲水牛、××桅檣（帆柱）丸、わきがのぬけるくすり、りんびゃうのくすり」などなど。早い話、お店ではちょっと買いつらい類の商品で、江戸古川柳に「長命丸日が暮れてから買ひにくる」「頼まれたとて（ひとから頼まれたと言ひ訳して）四ツ目屋で買っている」などと詠まれています。

ところで、四ツ目屋の代表的ヒット商品が、川柳にも詠まれた「長命丸」です。長寿の薬みたいですが、いわば江戸のバイアグラといったところ。もっともこれは塗り薬です。このトリセツの説明文が、実にものすご〜いのですが、ここではやめておきましょう。

今も、この種の品を扱う通販会社がありますが、「中身がわからないように送る」なども似たようなもので、人の考えることは時代が変わってもさして変わらないようです。